

私の平泉案内

平成15年3月 安倍富士男

遠方からの友人やお客さんのために、だいぶ前に作ったものです。
これでもよろしければ、どうぞご利用下さい。

1 岩手県

面積1万5277平kmはおよそ四国四県の大きさに相当。

東京、埼玉、千葉、神奈川よりも大きい。大阪、兵庫を合わせたよりも大きい。

東は太平洋 三陸海岸 リアス式海岸で有名

海まで切り立った断崖 北山崎

田野畑村 その昔有名な峠があって お役人が転勤がいやで身投げしたとの伝説あり

西は奥羽山脈（比較的新しい山地なので火山活動あり、温泉多数）

東に北上山地（古い地層なので火山活動なし、温泉皆無）

北上山地（準平地帯）の山中に遠野物語（民俗学者柳田国男著）で有名な遠野市あり

この北上山地と太平洋の間の沿岸部は、交通の便がはなはだ不便で日本最後の秘境と呼ばれていた。

（H16年 盛岡市での東北大学アジア文化研究センター所長 入間田先生の講演にて）

中央には、南下する大河 北上川（ヒタカミに由来 宮城県にヒタカミ神社あり）

全長250キロ日本第4位の河川（源流は「ゆはずの泉」岩手県岩手町御堂観音河口は宮城県石巻市）
県の大半は夏に涼やかなマセ（偏東風）におそわれるため、冷害がひどい。

そのため、元来熱帯植物の稲作には適さず、ヒエやアワ、ソバなどの雑穀を主食としていた。

これが、岩手のソバがおいしい理由 わんこソバ 他に南部煎餅

飢饉はひどく、各地に飢饉供養塔がある。また身売りなども最近まで続いていた。

冬の寒さは厳しく、本州最低温度を持つのは、青森ではなく、岩手県藪川（やぶかわソバで有名）である。

2 日本の歴史における岩手県

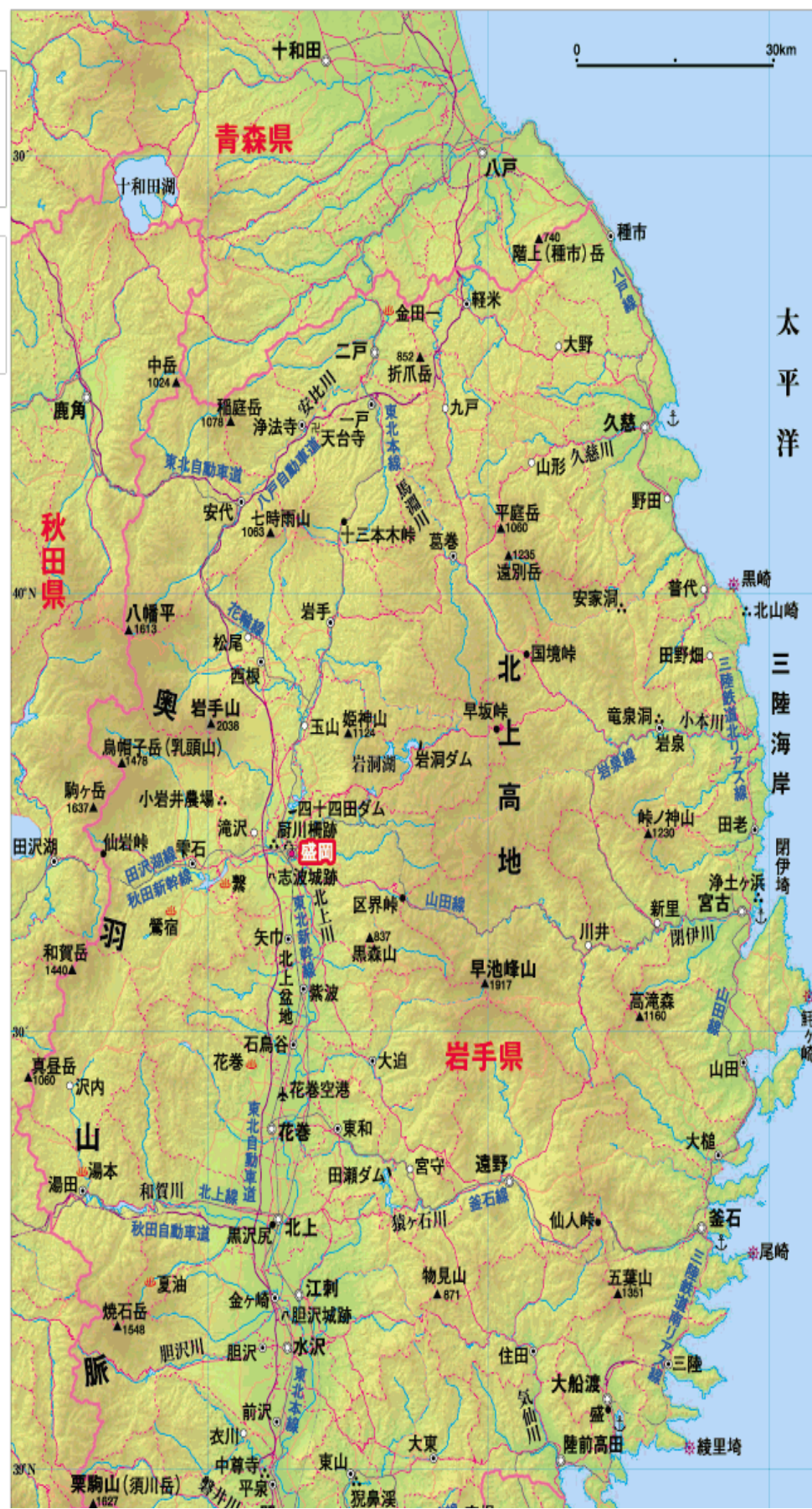
弥生文化の影響で文化は西から東に伝播するものと考えられていたため、東北は文化の果てる地と今日でも考えられている。（現在は縄文文化が各地で。その結果、見方が変わってきた）

それに対抗する考え方 東北芸術工科大学 赤坂先生 「いくつもの日本」

古代国家の時代は中央政府（奈良、京都）を離れる地域ほど、化外（けがい）の地であり、文化のはつとところが東北と思われてきた。

白河以北一山百文（白河の関から北の地は、一山百文で買える、という蔑称）＝河北新報社の社名の由来

岩手県



東北に対する偏見は今日に至っても、払拭されないでいる。

東北の何が魅力？ 日本最初の産金 宮城県涌谷町（金華山との誤認識） 古代の世界通貨

馬 古代、中世の車のようなもの つまり東北 = 自動車産業

- 平安貴族（坂上田村麻呂征夷大將軍）対 エミシ（アテルイ・モレ）

- 陸奥守兼鎮守府將軍源頼義と陸奥国の安倍氏の一族との間で戦われた戦乱

- 鎌倉幕府 源頼朝 弟の義経に謀反の企て。義経をかくまった藤原氏と敵対

- #### 4 豊臣秀吉の奥州仕置

天正十八年（1590）春、豊臣秀吉の小田原陣に参候。これに従わなかった奥州の再編成を行う。

- ## 奥州葛西氏滅亡（石巻城）

- ## 5 戊辰戦争での敗北（奥羽越列藩同盟の解体）

奥羽列藩の重臣は仙台で会合し、奥羽列藩より王制復古の業をなし遂げるべしとの趣旨から奥羽二五藩が仙台藩を盟主として同盟を結んだ。そして米沢藩の工作により、新発田（しばた）・長岡両藩が同盟に加入した。奥羽列藩がこのように動いたのには、直接にはその尊皇論の性格に起因している。それは、藩体制の否定を含まず、各藩の自立のうえに天皇をおくものだった。→福島 会津藩白虎隊の悲劇

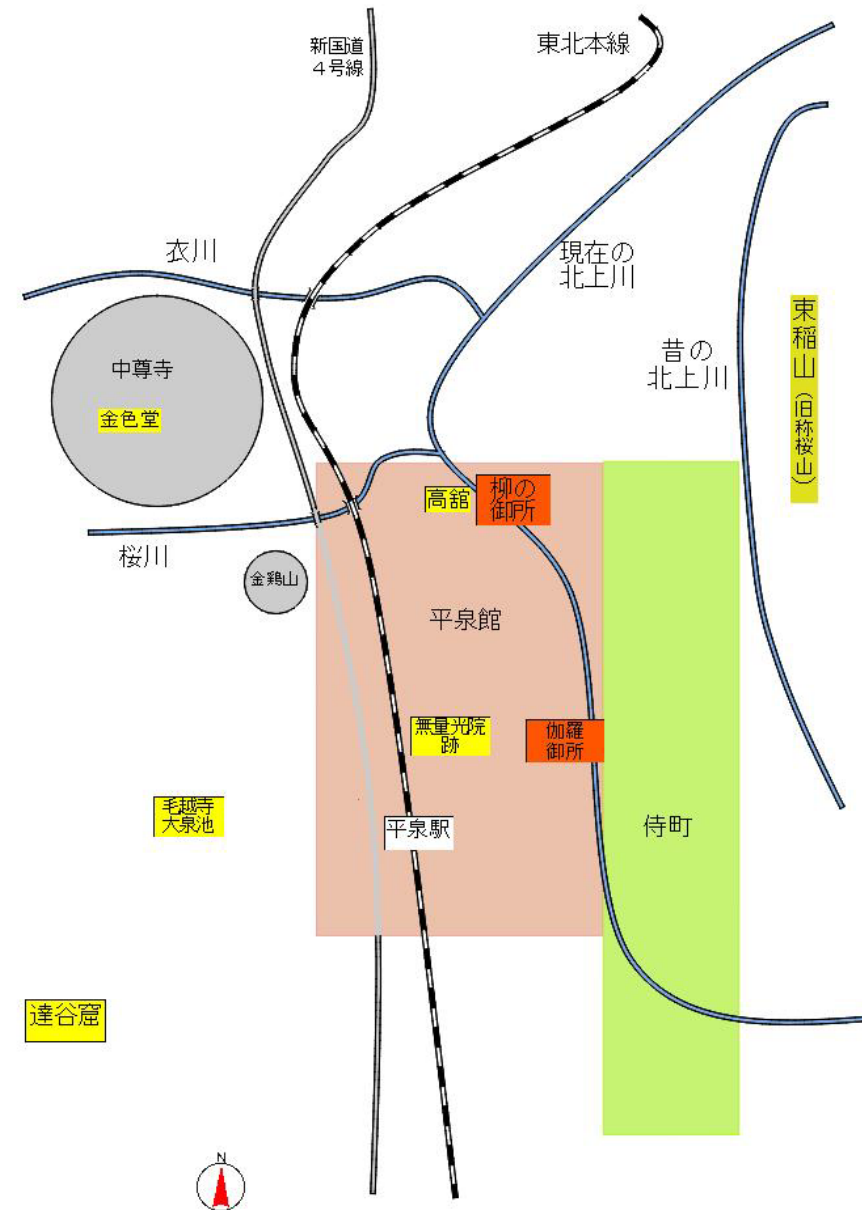
薩長有力政治家が占めた明治政府による東北蔑視

その渦中で明治政府の2大東北振興

日本最初の近代洋式港建設が宮城県鳴瀬町野蒜に。その後失敗 鉄道建設

失敗後、福島県安積疎水（明治政府のおやとい技師オランダ人ファン・ドールン）

このように、歴史的に屈辱的・侮蔑的・搾取される関係にあったが、これをくつがえしたのが、宮沢賢治の精神である。賢治の文学は深い地域性に根ざしながら、京都や江戸（東京）ではなく、世界、宇宙に展開していた。平泉概念図（安倍作成）



A 中尊寺内のみどころ

1 中尊寺

1. 関山中尊寺は天台宗東北大本山
2. もとは、北方の胆沢町方面へ抜ける「衣が関跡」
3. 中尊寺は、前九年・後三年の役（1051年～87年）のあと、奥州藤原初代清衡公によって2つの戦乱の死者を弔い、奥羽の安寧を願って建立されたもの
4. 寺塔四十余、僧坊三百余の大伽藍は1126年に完成（900年前）したが、兵火や火災にあって、現在はそのいくつかを残すだけとなっている

2 表参道月見坂

1. 樹齢300年の老杉 江戸時代の伊達氏による保存植林
2. 江戸時代まで、平泉は仙台藩（藩境は現在の北上市あたり。珍しい藩境塚）
3. また古代の東北の大動脈「奥州街道」は、この金色堂前を通過していた。
4. 衣が関、惣門、杉並木などはそのため。
5. 並木整備は江戸時代の徳川3代将軍の頃から、中国の駅伝制度を取り入れた。
6. 駅伝制度は、世界史上最大の帝国を作ったモンゴルのチンギス・ハンによって創始された世界で最初の通信制度（シベリアからヨーロッパまでユーラシア大陸のほとんどを征服）
7. 金色堂は、奥州街道を通る庶民からはよく見えた。

3 弁慶堂

1. 東物見台の反対側に弁慶堂（1826年）が建てられた。中に等身大の「弁慶の立往生」あり
2. 鶴亀松竹文彫（もんちょう）木笈（もくおい）もある（県重要文化財）
3. 弁慶は実在の人物ではなく、僧兵一般のことらしい（日本史専攻の教諭より教示あり）
4. 4号線には、弁慶墓（五輪塔）あり
5. 弁慶と義経の出会い＝ 京都五条大橋で千本狩りで義経と出会う。現在も五条大橋に義経・弁慶像あり

4 西行句碑

1. 西行 平安時代の歌聖
2. 「聞きもせず東稻山の桜ばな吉野の外にかかるべしとは」
3. 西行は、平安時代に二度も平泉を訪れている。
4. 東大寺再建のために奥州藤原氏に協力を取り付けること。金を求めて。
5. 能因（外が浜 青森県まで） 西行（平泉まで） 芭蕉（西行の後を追って）

6 日本の辺境にあこがれる歌の境地

5 積善院(しゃくぜんいん)

芭蕉展をやっている。庭もきれい。休憩によし。

6 中尊寺本坊

1. 山門の揮毫は元中尊寺貫主 今東光（こんとうこう）
2. 現本堂は1909年（明治42年）の建築
3. 中尊寺のすべての諸行事はここで行われる。貫主の居所もここにある。

7 峰の薬師堂

1. 西門を出ると峰の薬師堂 薬師堂のそばに願成就院宝塔（藤原時代のもの 国重要文化材）
2. 大日堂 茅葺きの屋根 鐘楼

8 大金堂跡

1. この辺りが一山の中心でかつては三重池があった。
2. 左に金色堂、右に大長寿院跡、白山神社
3. 阿弥陀堂（1715年再建） 蔵王権現の御影
4. 弁財天堂（1716年造立） 本尊は伊達綱村夫人の寄進
5. 釈迦堂（1719年造立） 昔は鳥羽天皇の御仏 釈迦三尊がまつられていた

9 金色堂(国宝 1124年 清衡69歳の建立)

1. 壁、柱、組物、垂木などはすべて厚く漆を塗って、その上に金箔を押してある。
2. 中央須弥壇には初代清衡の遺体、向かって左が2代基衡、右が3代秀衡の遺体がミイラで安置されている。4代泰衡の首級が安置されている。泰衡は源頼朝軍によって首がはねられた。
3. 金色堂は阿弥陀堂と葬堂を兼ねていた。
4. 螺鈿、蒔絵、透かし金具、瑠璃、漆芸金工の精緻を極める 平安後期の美術の粹
5. 象牙、螺鈿の夜光貝は異国のもの

10 経蔵(きょうぞう) 国重要文化財

1. 中尊寺供養願文（国重文）にも「紺紙金銀字交書一切経」を納めたとの記述あり。
2. 中尊寺の経典を入れておく大事なお蔵。約5000巻の一切経は今は4296巻が高野山金剛峰寺に移されて国宝となっている。

3. 一切経は、秀吉の命令で甥の秀次が1591年に九戸政実（くのへまざざね）の乱を鎮圧後に帰途没収し、高野山に寄進したものと伝えられている。

現在、中尊寺には国宝の紺紙金字一切経2793巻（このうち15巻が紺紙金銀交書一切経）、宋版一切経210帖を保存している。以前は2階瓦葺きであったが、1337年に焼失し現在は単層。現在、経巻はすべて讃衡蔵（さんこうぞう）に移され保存されている。これの経典は装飾性が高く、厳島神社の「平家経」となれば価値と言われている。

11 金色堂旧覆堂(おおいどう) 国重文

1965年（昭和40年）にコンクリートで覆われるまでは、この覆堂で金色堂が覆われていた。芭蕉が見た金色堂の外観もこの覆堂であった。鎌倉時代（1288年） 執権北条貞時と連署北条宣時が金色堂修復の際に造らせたと推定されている。棟札銘より。

12 能楽堂 県文化

1. 「人も旅人 吾も旅人 春惜しむ」 山口青邨歌碑
2. 新能 中尊寺の僧侶たちで継承されている喜多流の能や狂言が演じられる。

13 二階大堂跡(大長寿院)

能の観覧席あたりが「吾妻鑑」にある二階大堂跡。大きな二階建ての阿弥陀堂があり、征服にきた源頼朝は驚嘆し、後に鎌倉に永福寺を建てるきっかけになった。豪壮な大寺院であったらしい。

14 白山神社

中尊寺の北方鎮守社。

15 中尊寺資料館

泉ヶ城忠衡（ただひら）（和泉三郎忠衡とも）の館跡の土塁が見える。忠衡は秀衡の三男でありながら、義経には好意的で泰衡とは違った生き方をしたと言われている。忠衡は塩竈神社に鉄灯籠を寄進している。（忠衡寄進文治の鉄灯）

16 讃衡蔵(宝物館)

1. 華まん（国宝） 紺紙金字一切経（国宝）副葬品、経蔵の八角須弥壇、宝塔曼陀羅、丈六の仏像
2. 秀衡の護持仏である人肌の大日如来（一字金輪仏座像 いちじきんりんぶつざそう）は秘仏で一般公開されていない。

奥州藤原氏概略（京都の藤原氏と区別するため、奥州をつけて呼ぶ）

初代清衡(きよひら)

1. 初代清衡の父は宮城県亘理郡の豪族藤原経清（つねきよ） 母は安倍頼時（よりとき）の女（むすめ）。
2. 前九年の役で安倍氏に味方した父経清は敗死。清衡は母の再婚先清原氏に育てられた。
3. 清原氏の内紛で後三年の役が発生、清衡は源義家の援軍で勝利した。
4. その後、江刺市から居を衣川を超えて平泉に移し、仏都の建設に着手。中尊寺の建設に21年を費やす。京都の王朝文化を東北にもたらす。
5. 関白藤原師実（もろざね）に接近し、陸奥出羽押領使となる。1126年中尊寺伽藍落慶供養を行い1128年73で没。

2代基衡(もとひら)

1. 父は清衡、母は平氏の娘。成人して安倍宗任（むねとう）の娘を妻とした。
2. 父をもしのぐと言われる毛超寺の大伽藍を建設。
3. 経済基盤は、奥羽の砂金、駿馬（しゅんめ） 漆、練絹、皮革など。
4. 陸奥出羽押領使として、国司をもしのぐ力があつた。33年間平泉を支配。1157年54歳で没。

3代秀衡(ひでひら)

1. 平清盛の尽力で鎮守府將軍となる。
2. 源氏を牽制する平宗盛によって陸奥守に任じられた。
3. 軍治・行政の公権一切を掌握し、平泉は実質的に奥羽の政庁となる。平泉時代の最盛期。
4. 「奥の御館」（おくのみたち）として頼朝にも恐れられた。
5. 無量光院を建設。平泉は当時、京に次ぐ地方大都市となった。人口10万、広域では20万人とも言われ、この時代に西行法師も京から秀衡を訪ねて来ている。（東大寺建設に対する金の協力要請）。
6. 源平争乱後、源義経を庇護したが、1187年に没。

4代泰衡(やすひら)

1. 秀衡の死後、源頼朝の義経追討宣旨に屈して、義経を高館にて急襲し自殺に追い込んだ。この時、義経に味方した弟の忠衡をも殺害。
2. その後、頼朝の攻撃を受けて、平泉を逃亡し秋田県大館市で家臣に暗殺される。1189年35歳で没。

平泉は滅亡し、奥州藤原氏の時代が終わった。泰衡の時代は2年だけなので、通常は、藤原3代という。

(中尊寺以外の見どころ)

B 卯の花清水

「卯の花に兼房（かねふさ）見ゆる白毛（しらが）かな 曾良」
増尾（ましお）十郎兼房は義経の最期を見とどけて戦死した忠臣。このあたりが義経・弁慶主従が最期を遂げた戦場。春に白いユキヤナギの花が咲く。

C 高館跡

義経は兄頼朝の追求から逃れ、前九年・後三年の役で源氏ゆかりの地であった奥州藤原氏を頼った。京から奥州に義経を連れてきたのは、金売吉次（かねうりきちじ 三条吉次信高）と言われている。京都と平泉を往復した商人で、16歳の義経（牛若丸）を鞍馬寺から秀衡の元に連れてきた人物。彼の手を通して京の情報や産物が平泉に、また奥羽の砂金や馬は京に運ばれたと言われている。近年、金売吉次は、商人ネットワークの象徴的人物であって、物流を支えた巨大なグループが大勢いたものと言われている。

秀衡は義経をあたたく迎え彼に要害と景勝の地を居住の場として与えた。地元では判官館（ほうがんだて）とも言う。

芭蕉は、500年後にここを訪れて、次のように詠んでいる。

楮（さて）も義臣すぐつて此城（このじょう）にこもり、功名一時（いちじ）の叢（くさむら）となる。国破れて山河（さんが）あり。

城（じょう）春にして草（くさ）青（あお）みたりと笠（かさ）打敷（うちしき）て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や兵（つわもの）どもが夢の跡

現在は北上川が河道を変えて高館を削り取っているが、往時は異なっていた。泰衡の家臣により義経一族は急襲され自殺に追い込まれた。1189年4月 義経31歳で没。

その年の8月には頼朝が平泉を征服破壊するため、数十万の軍勢で東海道、奥州街道を北上しついに平泉滅亡となった。

江戸年間1683年に仙台藩主伊達綱村が建てた義経堂（ぎけいどう）がある。

ここは「判官びいき」の故事、「義経北帰行」の伝説の場所でもある。

D 無量光院跡(むりょうこういんあと)

無量光院は平泉全盛期、秀衡が京都の宇治平等院を模して建立した阿弥陀堂である。京文化へのあこがれ、京文化を凌ぎたいという気持ちあったと推察される。1952年（昭和27年）の発掘で翼廊が平等院より少し長いだけで、堂前の池の配置などはほとんど平等院を同じと言われている。院内の荘厳さ、三重の塔など、その壮麗さは平泉第一の寺院だった。

E 毛越寺(もうつうじ)

中心となる金堂円隆寺（えんりゅうじ）や嘉祥寺（かしょうじ）を含む一山の総称。2代基衡が鳥羽天皇の勅願で1105年に伽藍を建立。3代秀衡が建設を継承した。吾妻鏡に「吾が朝無双の精舎」と絶賛されている。

芭蕉句碑と新渡戸稲造碑 芭蕉の「夏草や」の英訳

南大門跡の礎石 平安浄土庭園の大泉が池など800年前の面影は池以外にない。

南大門は2階の惣門（吾妻鏡）とあり、芭蕉の見た「大門の跡は一里こなたにあり（高館で詠む）」とはこの門のこと。奥州藤原氏時代は、この南大門が平泉の表玄関だった。奥州街道は南大門からまっすぐ南に延びていた。

江戸年間（1716年頃）に造られた常行堂（じょうぎょうどう）がある。摩多羅神を祭る。旧暦1月の二十日夜祭（はつかやさい）は最大の祭礼。蘇民祭、深夜には「延年の舞い」（国民俗）が舞われる。

F 観自在王院(かんじさいおういん)

二代基衡夫人の別荘があり、それをのちに寺院にしたところ。1978年（昭和53年）に7年かかりで発掘復元された。阿弥陀堂跡 南門跡 西門跡 舞鶴が池 中の島が整備

平泉に関わる歴史資料・歴史用語についての解説

1 一切経・大蔵経(だいぞうきょう)とは？

仏教聖典を総集したもの。 一切経(いつさいきょう) **三蔵**(さんぞう) と呼ぶ。元来、大蔵経 の呼称は漢訳の 三蔵 に若干の中国人の斤述書を加えたものを指したが、現在ではその他の国語によるものも広く総称する。すなわち、漢語のほかに、パーリ語、チベット語、モンゴル語、満州語のものがあり、西夏語のものも一部現存する。漢語やパーリ語から日本語に訳したものもこれに準じて扱われる。また、元来は 大蔵経 に編入される書物の基準は厳格に決められ、それ以外のものは 蔵外(ぞうがい) と称されたが、近年日本で編纂されたものでは、より広範囲のものも含めている。

2 高野山とは？

和歌山県にある標高約900メートルの山。平安時代の西暦819年頃より弘法大師空海が修行の場として開いた高野山真言宗の聖地であり総本山金剛峯寺がある。

3 前九年の役 ぜんくねんのえき とは？

1056年(天喜4)から62年(康平5)まで、陸奥守兼鎮守府将軍源頼義と陸奥国の安倍氏の一族との間で戦われた戦乱。古くは源頼義が陸奥守になった1051年(永承6)から62年までの12年間を乱の期間と見て、奥州十二年合戦といわれていた。安倍頼良は先祖以来の俘囚(ふしゅう)(服属した蝦夷(えみし))の長で、奥六郡(伊沢、江刺、和賀、剌貫、斯波、岩手の6郡)の司であったが、早くから国司に反抗的で、六郡を横行し、人民を劫略(ごうりやく)すといわれていた。永承年中陸奥守藤原登任(なりとう)と秋田城介平重成の連合軍がこれを攻めたが、かえって鬼切部(おにきりべ)(宮城県鳴子町)で大敗するというありさまだった。しかし1056年武人として有名な源頼義が陸奥守になると安倍頼良はこれに服従し、名前も頼義と同音なのをはばかって頼時と改めた。ところが同年権守藤原説貞(ときさだ)の子光貞・元貞の人馬が何者かによって殺傷される事件がおこり、源頼義がこれを頼時の子安倍貞任のしわざと見て罰しようとしたため、頼時は貞任をかばって反乱を起こすにいたった。翌57年7月安倍頼時は鳥海柵(岩手県金ヶ崎町)で戦死したが、その後は貞任が一族を率いて戦い、同年11月の黄海(きのみ)(岩手県東磐井郡)の戦では大勝を得るといふ勢いだった。この戦況を転回させる契機になったのが、出羽国の俘囚長清原武則の参戦である。62年7月武則の援助を得た頼義は、小松柵以下の安倍氏の砦を抜き、9月7日ついに貞任を厨川柵(くりやがわのさく)(盛岡市)に破った。貞任は戦死し、降参した宗任(むねとう)らの一族は伊予国と大宰府に流されて、安倍氏は滅亡した。源義家が貞任に 衣のたてはほころびにけり と歌いかけ、貞任が 年をへし糸のみだれのくるしさに とつけたという故事は、この乱の一環の衣川の戦のときのこととされている(《古今著聞集》)。この乱はふつうは俘囚安倍氏の国家に対する反乱とされているが、同時に勃興しつつある武士の私闘の側面をもっており、その実相は複雑である。

4 後三年の役 ごさんねんのえき とは？

1083年(永保3)から87年(寛治1)まで、陸奥守源義家と清原一族の間で戦われた乱。清原氏をはじめ出羽国仙北3郡の豪族であったが、前九年の役あつて安倍氏の旧領の奥6郡をあわせて、奥羽最大の勢力になった。しかしその一族内部には複雑な対立が存在した。乱の直接の契機は清原武貞の3人の子の対立にある。この兄弟は、嫡子の真衡が先妻の子、家衡が後妻安倍氏(安倍頼時の娘、藤原経清の後家)との間の子、清衡がその後妻の連れ子という複雑な関係にあった。まず1083年清原一族の吉彦(きみこ)秀武が真衡と争って家衡・清衡を味方に誘い、家衡らは真衡の留守を攻めたが、このときは真衡の求めによって源義家が介入し、家衡らはこれに従った。その後真衡が出羽国で病死し、義家はその遺領の奥6郡を家衡と清衡に二分して与えた。しかし今度は家衡と清衡が対立し、家衡は清衡の宿所を焼き払い妻子眷属を殺害する、という挙に出た。ここにおいて清衡は義家に援を請い、戦いは義家・清衡対家衡のそれに発展した。家衡ははじめ沼柵(現、秋田県雄物川町)によって戦い、いったん義家を撃退し、ついで叔父武衡のすすめに従って金沢柵(現、秋田県仙北郡仙南村、横手市)に移った。大雪と飢餓のため戦いは困難をきわめたが、義家の弟新羅三郎義光が官職をなげうって駆けつけるということもあつて、87年11月義家らはようやく金沢柵をおとし、勝利を収めた。この戦いは私闘と見られたため、義家は何の恩賞ももらえなかった。しかし乱後その武名は大いにあがり、武門の棟梁の地位を固めた。一方清衡は乱後父の姓の藤原に復し、安倍・清原の遺領を継承して、奥州藤原氏4代の繁栄の基礎を

築いた。義家が飛ぶ雁の列の乱れるのを見て伏兵の存在を察知したという話や、 剛臆(ごうおく)の座 というものを設けて、部下の将士を励ましたという逸話は、このときのものとして有名である。

5 西行(さいぎょう、元永元年(1118年)って誰？

文治6年2月16日(1190年3月23日))は、日本の平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての僧侶、歌人。俗名、佐藤義清(さとうのりきよ)。もとは北面の武士だったが、出家。日本全国を行脚しつつ東大寺再建のための寄付を求める一方で和歌を詠んだ。新古今和歌集に多く入選。その作風と生涯は和歌だけでなく、松尾芭蕉など連歌、俳諧にも影響を与えた。

6 松尾芭蕉 略年譜 西行から芭蕉まで約500年

1644年（正保元年） 1歳

伊賀の国（三重県上野市）に、平家末流の松尾与左衛門の次男として誕生。幼名は金作。のち忠右衛門宗房と改名。

1656年（明暦二年） 13歳 父与左衛門死去。

1662年（寛文二年） 19歳

藤堂藩伊賀付侍大将・藤堂新七郎家に藤堂家の嫡子良忠の近習として仕える。良忠との出会いで芭蕉は俳諧の道を進むようになる。

1672年（寛文十二年） 29歳 「貝おほい」なる。

1674年（延宝二年） 31歳

この年、江戸へ。幕府御用達の魚商杉山杉風（さんぷう）名主小沢卜尺（ぼくせき）の世話になる。

1675年（延宝三年） 32歳 西山宗因の俳席にて「桃青」の俳号を用いる。

1677年（延宝五年） 34歳 俳諧の宗匠として世の中に認められて、其角・嵐雪の門人を得る。

1679年（延宝七年） 36歳 剃髪して「松尾桃青入道」と名乗る。

1681年（延宝九年） 38歳 前年の冬に深川に居を移す。この年の春に門人から贈られた芭蕉が、庭先に繁茂したことに因み「芭蕉庵」と号す。

1682年（天和二年） 39歳

「芭蕉翁桃青」と俳書に署名し、芭蕉の俳号が一般的になる。

12月の江戸の火事で芭蕉庵が類焼す。甲斐の国秋元藩家老のもとに翌年5月まで逗留。

1683年（天和三年） 40歳 冬に新築した芭蕉庵に移り住む。

1684年（貞享元年） 41歳 東海道、伊賀、大和、大垣、尾張、木曾、甲斐への「野ざらし紀行」の旅に出る。

1687年（貞享四年） 44歳

八月 曾良と宗波を伴って常陸の国（茨城県）鹿島に、参禅の師・仏頂和尚を訪ね「鹿島詣」を残す。

十月 伊賀、伊勢、吉野、大阪、須磨、明石への「笈の小文」の旅に出る。

1688年（貞享五年） 45歳 信濃国更科・善光寺・碓氷峠の「更科紀行」の旅を終えて、八月に江戸に戻る。

1689年（元禄二年） 46歳

三月二七日（陽暦五月一六日）曾良を伴いおくの細道」の旅に出る。八月二一日（陽暦十月四日）大垣で旅を終了する。

九月六日 伊勢に旅立つ。この年は大津の義仲寺（ぎちゅうじ）無名庵で越年。

1691年（元禄四年） 48歳 京都、大津、伊賀などを歩く。江戸に戻る。

1692年（元禄五年） 49歳 五月中旬 新築された芭蕉庵に移り住む。

1694年（元禄七年） 51歳

五月に江戸をたち、伊賀、大津、京都などを歩き、句会・遊山に興じる。

伊賀の故郷をたち、大阪に向かう途中病に倒れ、十月十二日（午後四時頃）大阪御堂前の花屋仁右衛門方で死去。

十月十四日、弟子たちの手で遺骸は義仲寺に運ばれ埋葬される。

（奥の細道の旅 講談社 1989から引用）

7 おくの細道原文と解説

おくの細道原文 声に出して読んでみよう

三代の栄耀一睡の中（うち）にして、大門（だいもん）の跡は一里こなたに有（あり）。
秀衡（ひでひら）が跡は田野（でんや）に成（なり）て、金鶏山（きんけいざん）のみ形を残す。

先（まず）高館（たかだち）にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河（たいが）也。

衣川（ころもがわ）は和泉が城（いづみがじょう）をめぐりて高館の下にて、大河に落入（おちいる）。
泰衡（やすひら）等が旧跡は衣が関を隔（へだてて）て南部口（なんぶぐち）をさし堅め、夷（えぞ）
をふせぐとみえたり。偕（さて）も義臣すぐつて此城（このじょう）にこもり、功名一時（いちじ）
の叢（くさむら）となる。国破れて山河（さんが）あり。
城（じょう）春にして草（くさ）青（あお）みたりと笠（かさ）打敷（うちしき）て、時のうつるま
で涙を落し侍りぬ。

夏草や兵（つわもの）どもが夢の跡

卯（う）の花に兼房（かねひさ）みゆる白毛（しらが）かな 曾良

兼（かね）て耳（みみ）驚（おどろか）したる二堂開帳す。

経堂（きょどう）は三将の像をのこし、光堂（ひかりどう）は三代の棺を納め、

三尊の仏を安置す。七宝（しっぽう）散（ちり）うせて、珠（たま）の扉（とびら）風（かぜ）にや
ぶれ、

金（こがね）の柱霜雪（そうせつ）に朽（くち）て、既（すでに）頽廃空虚（たいはいくうきょ）の
叢と成（なる）べきを、四面新（あらた）に圀（かこみ）て、薨（いらか）を覆（おおい）て風雨を
凌（しのぐ）。暫時（しばらく）千歳の記念（たかみ）とはなれり。

解説

次に見たもの、（見なかったもの）などをあげて簡単に説明し芭蕉の句、及び文を理解する助けとしたい。

1 「三代の栄耀（えいよう）一睡の中（うち）にして、大門（だいもん）の跡は一里こなたに有（あり）。」

「三代の栄耀」とは、平安末期の約100年間に渡った平泉文化を担った藤原清衡・基衡・秀衡・泰衡の

四代中の最後の三代を指す。泰衡で藤原文化は滅亡する。この平泉の文化の特徴は三つあって、蝦夷、みちのくと呼ばれて文化の存在しないところとされてきたところに都に匹敵するほどの独自の華麗な文化が開花した点、東北の統一、日本史上の黄金文化の典型をなす「皆金色文化」である。（金色堂や「紺紙金銀字交書一切経」などが有名）

2 「秀衡（ひでひら）が跡は田野（でんや）に成（なり）て、金鶏山（きんけいざん）のみ形を残す。」

「秀衡が跡」は、「伽羅の御所（きゃらのごしょ）」のこと。文字通り秀衡の居館であり、泰衡もここに住んだが、1189年源頼朝に攻められて火を放って敗走した。無量光院の一郭に位置する。伽羅の名前は、館の材の一部にキャラ（香木でも最高のもの）を使用したとか、唐風（からふう）の造りだった等の説がある。

初代清衡・二代基衡の居所が「柳の御所」、三代秀衡・四代泰衡の御所が「伽羅の御所」と押さえよう。「柳の御所」は、義経が頼朝の追求を逃れて再び秀衡を頼った時に、はじめのうち、この「柳の御所」にいたと言われている。高館のふもとにあったが、1189年に頼朝に攻められ逃げる泰衡が火を放って焼失。翌日に頼朝が平泉に入ったときは灰燼に帰していたという。現在は北上川の河床にかかっている発掘調査が進められている。

3 「先（まず）高館（たかだち）にのぼれば、北上川、南部より流るゝ大河（たいが）也。」

高館義経堂（たかだてぎけいどう）。「たかだち」とも読み、さらに判官館とも言う。源義経の居城跡で最期を遂げた場所。丘の上に1683年（芭蕉40歳）の時に、仙台藩主伊達綱村が建立した義経堂があり中に義経像がある。館の跡は、北上川の流れに削られて現在は絶壁となっている。古戦場が一望できる。南部というのは、南から北に流れるのではなくて、昔岩手県は南部氏が支配していたため、北の方を南部（氏の方角）と言った。

4 「衣川（ころもがわ）は和泉が城（いづみがじょう）をめぐりて高館の下にて、大河に落入（おちいる）。」

地図参照。大河は北上川のこと。北上川は長さ 2 4 9 km で日本で第 4 位の大河川。

5 「泰衡（やすひら）等が旧跡は衣が関を隔（へだてて）て南部口（なんぶぐち）をさし堅め、夷（えぞ）をふせぐとみえたり。楮（さて）も義臣すぐつて此城（このじょう）にこもり、功名一時（いちじ）の叢（くさむら）となる。国破れて山河（さんが）あり。城（じょう）春にして草（くさ）青（あお）みたりと笠（かさ）打敷（うちしき）て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。」

泰衡等が旧跡は、同じように伽羅御所。北側に秀衡の居所、南に泰衡の居所があった。

南部は南部氏の方角つまり北側。だから夷（蝦夷とも書く、「えぞ」とか「えみし」と読む。）は北方にいる。

6 「兼（かね）て耳（みみ）驚（おどろか）したる二堂開帳す。経堂（きょどう）は三将の像をのこし、光堂（ひかりどう）は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。」

光堂は、中尊寺金色堂のこと。

中尊寺は、1 1 0 9 年 清衡が起工して 1 6 年の歳月をかけて 1 1 2 4 年に竣工した。清衡・元衡・秀衡三代の遺体（ミイラ）が安置されている。他に泰衡の首もある。1 2 8 8 年金色堂保護のため覆堂（おおいどう）が作られた。昭和 4 3 年に金色堂の復元修理が行われたため鉄筋コンクリートの新覆堂が完成したため旧覆堂が取り外された。その後、旧覆堂は重要文化財として保存された。金色堂の脇、経蔵への道の左側に芭蕉句碑がある。 五月雨の降残してや光堂

岩手県の地理 全般の知識 (岩手県ホームページより引用しました。)

岩手[県] いわて

面積 = 1 万 5277.76km²(全国 2 位)

人口 (1995) = 141 万 9505 人 (全国 30 位)

人口密度 (1995) = 93 人/km²(全国 46 位)

市町村 (1997.4) = 13 市 30 町 16 村

県庁所在地 = 盛岡市 (人口 = 28 万 6478 人)

県花 = キリ 県木 = 南部アカマツ 県鳥 = キジ

東北地方の北東部に位置する県で，南北 195km，東西 123km の南北に伸びる紡錘形をなす。太平洋に面し，海岸線の延長は 666km。面積は全国都府県のうち最も広く，北海道に次ぐ。人口密度も北海道に次いで希薄である。

[沿革]

近世には陸奥国のうち，南部氏の盛岡藩と伊達氏の仙台藩，一関藩に属した。1868 年 (明治 1) 戊辰戦争の結果，盛岡藩 20 万石は白石 13 万石に移され，仙台藩，一関藩も減封され，また陸奥国は 5 国に分割された。現在の岩手県域は陸中国の大部分と陸前国，陸奥国の一部にあたる。69 年南部氏は盛岡に復帰し，没収地には胆沢 (いさわ)，江刺，九戸 (くのへ) の諸県が置かれた。71 年廃藩置県をへて，これらは一関県 (のち水沢県，磐井県と改称) に合併された。1870 年に盛岡藩を廃して置かれた盛岡県は 72 年岩手県と改称し，76 年磐井県のうち陸中国の 3 郡を併せたのち，宮城県，青森県の一部を合併して，現在の県域が定まった。 陸奥国

[中央から遠い北国]

岩手県の地は，みちのく といわれた奥州のうちでも中央文化からほど遠い辺境の地とされてきた。8 世紀中ごろ奥州開発が積極化し，坂上田村麻呂の蝦夷攻略を通して岩手は北上川沿岸から開かれ中央と結びつけられていった。奥州藤原氏が平泉の地に独自の黄金文化を築いたが，中世の岩手は鎌倉御家人によって分割支配され，盛衰・興亡をくりかえした。中でも南部氏は馬産の盛んな糠部郡 (現在の二戸・九戸両郡から青森県三戸・上北・下北各郡，秋田県鹿角郡) を領し，近世になって，盛岡藩内には閉伊郡小友 (おとも) 金山や鹿角郡白根金山，尾去沢銅山などが開発され，三陸沿岸からは幕府長崎貿易の見返品として重要な三陸俵物 (海産物) を出荷していた。しかしここに住む人々は寒冷な北国において，最も不利な条件にある農業に頼らなければならなかった。岩手の農民生活史が悲惨な冷害凶作の連続であったのも，このためといえよう。また明治に入ってから，近代産業の先駆といえる釜石の製鉄業の発展を例外として，中央の大消費市場から遠いことが，さまざまな産業で岩手の発展を遅らせてきた。

1890 年東北本線が上野～盛岡間に開通し，以後舟運，街道交通は衰えていった。1982 年東北新幹線が盛岡まで開通して，首都圏から 3 時間前後に短縮され，97 年春には秋田新幹線 (田沢湖線) が開通して， 白河以北一山百文 という言葉は，今や過去のものとなった。さらに東北自動車道

が 86 年青森市まで全通，97 年秋田自動車道も全通して，中央に遠い北国 という古くからの課題が，ようやく克服されてきた。

[ダムと米と畜産]

岩手県は，北上川縦谷盆地 (北上盆地) とそれをはさむ奥羽山脈，北上高地の 3 条の巨大な地形によって特色づけられ，東縁は三陸海岸線となっている。南流する北上川は一関市の南，狐禅寺付近で北上高地を横切るとき，宮城県域も含めて約 25km に及ぶ峡谷を形成している。近世に北上川舟運が上流部の盛岡までさかのぼって物資や文化の輸送路となってきたのも，この峡谷部があるために豊かな水量が上流部にたたえられ，流れのゆるやかな河川であったことによる。しかしその反面，水はけが悪く，3 年に 1 度は洪水におそわれてきたが，特に 1947 年のカスリン台風，翌年のアイオン台風による被害は，一関付近を中心に惨状をきわめた。これを契機として 53 年アメリカの TVA の経験を取り入れた北上川特定開発によるダム建設時代を迎えた。80 年までの間に石淵ダム (胆沢川)，田瀬ダム (猿ヶ石川)，湯田ダム (和賀川)，四十四田 (しじゅうしだ) ダム (北上川)，御所ダム (雫石川) の五つの多目的ダム (洪水調節，発電，灌漑) が築かれた。これらによって，稲の県内総作付面積は昭和 20 年代の約 1.7 倍に当たる 10 万 ha (1995) にも達し，収穫量の 7 割を 岩手米 として移出する米の生産県へと発展した。岩手県では主として千島海流の発達に伴う夏季の冷温や，北部海岸に多いガスや日照不足によって，農作物に冷害がおこりやすい。耕地面積の 4 割を占める畑作農業は，冷害に強いヒエを中心とした雑穀農業であったが，近年は葉タバコ，ホップ，リンゴ (いずれも出荷量は全国 5 位以内) や，高原野菜などの換金作物および畜産の導入がはかられている。特に中世以来の伝統をもつ北上高地での馬産は，明治以後，馬から役牛，肉牛へ，さらに昭和に入って乳牛へと移行し，1996 年乳牛，肉牛の飼養頭数はともに全国 5 位以内へと増加し，北上山系の畜産開発とともに広い原野をいかした肉酪供給県としての地位を高めている。しかし，県内農家戸数は漸減し，全体の約 1 割を占める専業農家の割合は大きな変化がないが，第 1 種兼業農家は全体の約 2 割に減少し，第 2 種兼業農家が 7 割弱と激増した。

[北上川筋の企業団地]

岩手県の産業構造の特色は，就業別人口において第 1 次産業が全体の 18.8 % (1992) を占めて全国で青森県に次いで高く，農業への傾斜の強いことである。しかし，高速交通の整備は大都市からの企業進出を容易にし，産業構造の高度化への可能性を一段と高めている。

明治以降，岩手県工業の先駆をなしたのは明治 20 年代に盛んになった製糸業と，1857 年 (安政 4) 南部藩士大島高任によって日本最初の洋式高炉が建設され釜石鉱山の鉄鉱石を原料として開始された製鉄業であった。その後，製糸業が衰退し，釜石鉱山は 93 年終掘，釜石製鉄所 (1970 年より新日本製鉄) も相次ぐ合理化によって，往年の活気は失われてきた。県では 1955 年以来，工場誘致に乗り出し，1995 年現在，精密機械，電気機器，輸送用機器，一般機器などの業種が目立っている。特に北上川筋は，国道 4 号線とほぼ平行して東北自動車道，東北本線および新幹線が走り，その中央部に花巻空港 (1964 設置) が位置する。これと結びついて金ヶ崎中部工業団地，一関東工業団地，

北上工業団地，江刺中核工業団地など，企業ニュータウンの形成が進められている。自動車道では，京浜・京阪神両市場をめざし，水産物や野菜，果樹，畜産物を運ぶ大型トラックが定期便のように南下する光景が見られ，近年はこれに加えて先端技術産業の工業製品なども陸上輸送されている。ここに盛岡，花巻，北上，水沢，江刺，一関の内陸部都市を母体に，先端技術，IC(集積回路)産業の導入をはかる北上ライン先端技術工業地帯の構築が進められている。なお，伝統工業として近世以来の南部鉄器，漆器工業の秀衡(ひでひら)椀や岩谷堂たんすなどの工芸品が生産されている。

[三地域の特性]

県内は自然条件，人文条件の違いから東西に並ぶ次の三つの地域に分けられる。

(1) 北上川縦谷盆地 北上川に沿う低地帯で，北上盆地とも呼ばれ，流域面積 1 万 0150km²，そのうち約 8 割が岩手県分で利根川，石狩川，信濃川に次いでいる。県内では最大の平野部であり，その西側は河岸段丘や扇状地が発達し，奥羽山脈の断層崖に続いている。かつてはこれらの扇状地や台地の末端に胆沢城(802)や志波(しわ)城(803)などが築かれ，沖積地とともに早くから東北開拓の拠点となった。江戸時代は北上川が舟の交通路となり，奥州街道も南北に走り，現在の一関，水沢，黒沢尻(北上市)，花巻，盛岡などのおもな都市は，当時の宿場町や河港集落を母体として発展した。この地域は県の穀倉地帯であり，幹線交通路も集中している。藤原文化を受けつぐ歴史の町平泉や花巻温泉郷などは，東北観光ルートの基地でもある。

(2) 奥羽山脈東麓地帯 北部には七時雨(ななしぐれ)山に続く高原があり，八幡平，岩手山，駒ヶ岳など 1500m前後の山々が集まって十和田八幡平国立公園の雄大な自然美を作り出している。その中でも岩手山(2041m)は南部富士ともいわれる円錐状火山で，付近に多くの温泉が湧出し，松川地熱発電所(2 万kW)，損根田(かつこんだ)地熱発電所(5 万kW)などもあり，北東北(きたとうほく)の観光の中心地となっている。南部は栗駒山と焼石岳を結ぶ栗駒国定公園で，須川(すかわ)，夏油(げとう)などの温泉をもつ山岳公園が広がる。奥羽山脈を東西に横切る交通は，今では白木峠近くに秋田自動車道，国道 107 号線と JR 北上線が走り，米代川に沿って花輪線，東北自動車道，仙岩峠をこえる秋田新幹線(田沢湖線)が通じている。

(3) 北上高地と三陸沿岸地帯 岩手県の東半分を占める高地(山地)で，なだらかな準平原が続き，高い山の少ないかわりに奥行きの深い山系である。一段と高い早池峰(はやちね)山(1914m，国定公園)や五葉(ごよう)山，兜明神(かぶとみょうじん)岳，姫神山などの山々は，浸食から残された残丘である。この山地では砂鉄を多く産し，燃料の木炭と結びついて砂鉄製鉄が盛んとなり，17 世紀中ごろ以後，藩の奨励もあって南部鉄器の製造業が発展した。また，準平原の平たん面を利用して中世以来南部馬の産地として知られ，近年は酪農と畜産を柱とした北上山系開発が進められている。集落が山ひだに点在する山村であるために，畑作儀礼，狩猟儀礼，南部曲家形式の建物などが多く残る民俗学の宝庫でもあり，柳田国男の《遠野物語》で有名な遠野盆地は，民話・伝説のふるさととして観光客が跡を断たない。

北上高地が太平洋に向かって落ち込む三陸海岸は，地形的には宮古以北の隆起性の段丘海岸と以南

の沈降性のリアス海岸に分けられるが，陸中海岸国立公園の景勝地である。沖合には豊かな三陸漁場をひかえ，養殖漁業も盛んで，久慈，宮古，釜石，大船渡，陸前高田などの都市がある。高地を横断する交通には JR 山田線，釜石線，大船渡線があり，1984 年には三陸沿岸を南北に走る第三セクターによる三陸鉄道が開業した。高地北部の八戸自動車道は 89 年開通したが，高地を縦断する国道 340 号線の整備，高地の横断高速道の整備などが今後の課題となっている。